新しい景気変動の理論と実際

原　祐三著

有限会社　経済新誌社

原　祐三著

新しい景気変動の理論と実際

有限会社 経済新誌社版

著者略歴

戦前経済雑誌「ダイヤモンド社」取締役、主筆・編集局長の職を行い、兼ねて企画院委員、商工省・大蔵省の物価統制その他の委員等を歴任した。戦時中日本証券取引所嘱託(参事待遇)編集室主幹。戦後は有限会社経済新誌社を創立主宰し、かつ東京都商工指導所商業部長、東京経済大学教授、亜細亜大学教授を勤めた。戦前から三十年近く早大の講師を兼任した。四十七年早大教授を停年退職。現在は創価大学教授である。

昭和四十二年十月一日 暫定版印刷発行
昭和四十三年三月一日 初版印刷発行
昭和四十六年十月一日 四版印刷発行
昭和四十七年十月一日 五版印刷発行
昭和四十九年三月一日 六版印刷発行
昭和五十一年三月一日 七版印刷発行
昭和五十二年八月一日 八版印刷発行

新らしい 景気変動の理論と実際

定価 二、〇〇〇円

著者 原 祐 三

東京都大田区北馬込二丁目三六ノ九

発行所 有限会社 経済新誌社

電話 (七七一) 五三七八

振替東京六—一九五二三五番

東京都豊島区南大塚二丁目二ノ四

印刷所 株式会社 新樹社印刷所

代表者 浜中隆彦

かつての協力者にして
生涯忘れ難き心の友

故鵜殿茂樹君の霊に捧げる

序

私が本書に「新らしい景気変動の理論と実際」と名付けたのは、本書の内容をなしている理論や実際的な知識が、あえて新らしいものという自賛の意味ではなく、戦後に復活せりといわれる〝景気循環〟が、はたして戦前的な、あるいは十九世紀的な〝景気循環〟と同じものとして理解し得るか、どうかという疑問にある。もとより戦前の理論や経験のすべてを否定し、全く〝新らしいもの〟として観察したり、分析したりしても、恐らくその知識には稔りがなく、その研究は不毛であろう。それ故に、戦後の景気変動の乏しい経験を土台にし、戦前からの理論的知識、統計的方法、歴史的研究、環境的事情の究明等を適用して、とるべきものはとり、捨てるべきものは捨てて、新らしい解釈をうちたてねばならぬという意味である。

「景気変動の理論と実際」という書名は、決してモダーンでスマートなタイトルではないが、実は私の若いときから、四十年にわたる私の夢であった。私は四十余年のむかし母校早稲田大学の商学部を卒業すると同時に、経済雑誌ダイヤモンド社の景気研究部へ就職して、景気観測の技手たるべき見習から人生修業を始めた。当時同社の創立者で社長であった故石山賢吉氏が、早大教授故小林新氏に嘱託し、米国で盛んであった景気研究所を同社の中に設けようとしたのである。私は小林新先生の助手として就職したわけである。同先生は、経済統計学、金融論を専攻する新進学者で、米国へ留学するに当り、パーソンズやミッチエルなどの、景気観測の統計学的研究を学んで帰国されるよう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に、同社から委嘱を受けていたのである。小林先生は、その後一二年にして同社を去られ、大学の仕事に専念されるようになったが、私はその後に残り、責任者となって、昭和十年代の準戦時統制により、景気変動が終熄するまで研究を続けた。

この間において、故鵜殿茂樹君らが私を助けてくれ、また同社の景気研究部は、新入社員を一人前の経済記者に育てる役割りを担わされ、ここから幾人かの後日同社の幹部になった人や、他の事業会社の役員になった人が机を並べていた。同社の景気研究事業は、本書の中にも書いておいたように、結局所期の効果を納めることはできなかったけれども、私たちにはよい勉強の場になった。その意味で、私のこの著書がかくあるについては、私たちに久しきにわたり、研究の機会と職場とを与えてくれた故石山賢吉氏に負うものである。

当時私は、実際に疏い純理論的な学究的感覚でも、現実の経済動向は観測できるものでないし、単に記者的な理論に弱い事情通的知識でも、経済の動きは、見通しのできないものであることを痛感していた。そして私自身は、衒学的なアカディミズムにも抵抗を感じ、記者的な情報通的知識にも敬意を持てず、何とかして、理論と実際に通じる技師的な人物になり、できたら「景気変動の理論と実際」というような著述を、世に発表したいと思っていた。

その後戦争中の昭和十八年に私は同社を退き、終戦時まで日本証券取引所に在籍して、証券市場のことを見聞した。この間召集も受け、九十九里の戦線で敗戦を迎えた。戦後昭和二十一年から「経済新誌」という個人的な雑誌を発行して、四十一年末まで、二十年余に及び、この誌上に時々景気観測を発表する必要を持ったが、概ね大過なく、幸いにして、ひどく読者を裏切ったということはない。昭和二十九年四月からは、東京経済大学の教授となり、また

昭和三十二年からは亜細亜大学の教授となって、ともに景気変動論を講じてきたが、それでも過去半生の志望であった景気変動論の著述をなす機会には恵まれなかった。そして四十二年から、雑誌を廃め、専ら早稲田大学の教授となって、いささか閑暇を得たので、もとより学力は未熟であり、準備も不足であったが、多年の宿志のために、拙い著述であることは覚悟の上で、この書物を上梓することに踏み切ったのである。あだかも昭和四十三年は明治百年に当るので、附章として、明治百年の景気変動を加えることにもした。私にとって、生涯の最初に発表すべかりし著述が、通貨論、物価論、経済原理や金融論、工業経済学の著述よりも、後のものとなったことも感慨深いものがある。

序文の筆をおくに当り、私にとって忘れ得ぬ若き日の恩師、石山賢吉、小林新両先生に深き感謝を捧げねばならない。

昭和四十三年二月四日

馬込尚古書屋

原　祐　三

目次

（一）景気変動とは何であるか……（一）

（1）景気変動の伝統的理解……（一）

（A）―戦前の定義と内容……（一）

Ⅰ かつての社会的通念……（一）

Ⅱ 戦後への推移……（四）

Ⅲ 戦前の定義の構成……（五）

（B）―十九世紀的事実……（七）

Ⅰ 機械的循環の思想……（七）

Ⅱ 循環思想への懐疑……（九）

（C）―構造変化と量的変動……（一一）

Ⅰ 経済活動量の測度……（一一）

Ⅱ 利子率および雇用水準……（一三）
（D）―回帰的変動と他種変動……（一四）
（2）戦後の新らしい定義への修正……（一八）
（A）―景気変動の復活……（一八）
Ⅰ 米国の長期繁栄……（一八）
Ⅱ 戦後日本での明暗諸相……（二一）
Ⅲ 技術革新と貿易為替自由化の影響……（二六）
Ⅳ 証明された景気変動の実在……（三〇）
（B）―景気変動の変貌……（三六）
Ⅰ 週期性と循環性の変化……（三六）
Ⅱ 回帰的変動観の不適化……（三七）
Ⅲ 景気調整策の進歩……（四四）
（C）―ハーバラー学説の新展開……（四六）
Ⅰ 好況・不況の定義と基準……（四六）

II 戦後の新事態への接近……（五二）
(D)—新らしい定義の確定……（五七）
I 研究対象をいかにつかむか……（五七）
II 景気変動を景気変動ならしめるもの……（五九）
(二) 景気変動はなぜ起るかの学説史……（六一）
(1) 古典的恐慌論……（六一）
(A)—一般的生産過剰説とこの反論……（六一）
I マルサスの生産過剰説……（六一）
II セイらの部分的生産過剰説……（六四）
(B)—早期社会主義の恐慌論……（六五）
I シスモンデイの消費不足説……（六五）
II オーエンとロドベルトウス……（六七）
(C)—マルクスの週期的恐慌論……（六八）

Ⅰ 共産党宣言の中から……（六八）
Ⅱ その理論的構造……（七〇）
Ⅲ 拡大再生産の行詰り……（七三）

（2） 景気循環論の成立……（七八）

（A）―恐慌循環から景気循環へ……（七八）
Ⅰ ジュグラールとジェヴオンズ……（七八）
Ⅱ ツガン・バラノフスキーの学説……（八〇）

（B）―統計的研究の流行……（八四）
Ⅰ 統計的景気観測……（八四）
Ⅱ ミッチエルおよび景気の大波・小波説……（八六）

（C）―理論的研究の復活……（八九）
Ⅰ ブニアチアンの価格中心動態論……（八九）
Ⅱ シュピートホッフその他の過剰投資説……（九一）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

(3) 近代経済学の景気変動論……(九五)
(A)—物価中心から利子中心の学説へ……(九五)
I フィッシャーの物価中心論……(九五)
II ウイクセルの利子中心論……(九八)
(B)—ハイエク、ケインズ、その他……(一〇六)
I ウイーン学派の代表ハイエク……(一〇六)
II ホートレイとケインジアン……(一一二)
(C)—景気原因学説の要約……(一一七)
I 財貨側原因説……(一一七)
II 貨幣金融側原因説……(一二〇)
(D)—ハーバラーの要因及び学説の分類法……(一二二)
I 景気変動の要因の分類……(一二二)
II 景気変動の学説の類型……(一二四)

(4) 戦後の景気変動理論……（一二七）
(A)—その展望的考察……（一二七）
I 有効需要の原理……（一二七）
II サミュエルソンおよびヒックスの方法……（一三一）
(B)—加速度原理……（一三四）
I 原理の原型と拡充……（一三四）
II 数字模型と景気論への適用……（一三六）
(C)—投資乗数の理論……（一三九）
I 公式の誘導と決定……（一三九）
II 慢性不況の説明と対策……（一四二）
(D)—貿易乗数の理論……（一四六）
I 開放モデルと輸出乗数……（一四六）
II 投資乗数との総合……（一四八）
(E)—ハロッドの動態学……（一五〇）

Ⅰ　三つの成長率間の理論……（一五〇）
Ⅱ　景気変動論への適用……（一五四）

（三）景気変動はやめられない……（一五八）

（1）需要増加と生産力拡大……（一五八）

（A）―販売・事業欲・好不況の必然性……（一五八）
Ⅰ　景気変動の弊害と調整……（一五八）
Ⅱ　景気変動必然の原理……（一六一）
（B）―設備投資の圧力……（一六六）
Ⅰ　設備投資の意義と作用……（一六六）
Ⅱ　上昇運動の行詰り……（一六八）
（C）―拡大均衡と縮小均衡化……（一六九）
Ⅰ　数量景気への回復……（一六九）
Ⅱ　行詰りと不況化の原理……（一七一）

(2) 銀行信用の拡大と収縮……(一七五)
(A)—貯蓄資金と造出資金……(一七五)
I 国民貯蓄の地位……(一七五)
II 資金造出の機能と制約……(一七八)
(B)—銀行信用の循環……(一八三)
I 金融情勢と利子率の動き……(一八三)
II 金融基調と銀行勘定……(一八五)
(C)—利子率の変動と景気……(一八七)
I 自然利子と銀行利子の関係……(一八七)
II 投資への推進力……(一八九)
III 金融からの景気調整……(一九一)
(3) 財政操作と景気変動……(一九四)
(A)—財政思想の変化……(一九四)
I 健全財政の思想……(一九四)

II 機能財政の思想……（一九六）
（B）―政府部門と所得循環……（二〇〇）
（C）―機能財政の運営……（二〇三）
I 収支均衡と積極主義……（二〇三）
II 税金・公債金・揚超と撤超……（二〇六）
（4）国際均衡と国内均衡……（二〇八）
（A）―国際収支の重要性……（二〇八）
I 景気運動を制約するもの……（二〇八）
II 国際収支の内容と構成……（二〇九）
（B）―世界貨幣と各国の景気……（二一三）
I ドル・ポンド体制の長短所……（二一三）
II 残された金の地位……（二一六）
（C）―国際流動性増加の影響……（二一七）
I 問題の内容・理由と発展……（二一七）

Ⅱ IMFの新機関通貨……（二二二）
(D)—景気変動と貨幣価値……（二二五）
Ⅰ 有効需要と物価の動き……（二二五）
Ⅱ 物価の動きと利子率の関連……（二二九）
Ⅲ 為替相場と物価・利子率の関連……（二三〇）
(E)—景気変動と消費生活……（二三三）
(5) 景気変動と証券価格……（二三八）
(A)—株価の基本的構造……（二三八）
Ⅰ 資本市場としての重要性……（二三八）
Ⅱ 基本的構造要因……（二四〇）
(B)—投機と株価の変動……（二四三）
Ⅰ 投機性の根拠と性格……（二四三）
Ⅱ 投機盛行の影響……（二四六）
(C)—株価観測の諸指標……（二四八）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com